

令和3年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月19日実施)	総合評価 (3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	①新学習指導要領を基盤にクリエイティブスクールの特性を融合した新しい教育課程を確立する。 ②生徒が学ぶ楽しさを実感できるような授業方法を確立する。	①「授業のユニバーサルデザイン化」を図り、生徒がより理解しやすい授業を作り上げる。 ②プロジェクトチームにより4年度の総合的な探究の時間や学校設定科目の詳細な内容を決定する。	①授業改善のための授業互見や研究協議会に全職員で取り組む。 ②定期的にプロジェクトチーム会議を開催し、生徒の実情に合わせかつ効果的な探究及び授業内容を設定する。	①生徒による授業評価の「かなりあてはまる」「ほぼあてはまる」の割合を80%以上を達成できたか。 ②効果的な授業内容の設定ができたか。	①生徒による授業評価の「授業の在り方」については小項目すべてで「あてはまる」の割合が80%以上を達成した。 ②学年に学び直しから応用までカバーする内容の「RT-21」を設定した。	①授業評価の「あてはまる」の割合(生徒の満足度・理解度)が85%以上になるよう、さらなる授業改善を行う。 ②「RT-21」は個々の実情に合わせた課題や教材の作成が必要不可欠である。	①生徒の躰きの分析をすることでさらに良い結果を生み出せる。 ②「RT-21」の設定、「学習サポート」の工夫など学び直しの取組の充実に向けて努力がなされている。この成果に期待する。また「RT-21」は生徒一人ひとりの実態に合った課題設定と学習プロセスの関係に注目している。	・学校設定科目「RT-21」を設定し新しい学び直しの手立てをつくることができた。新たな取組みゆえに授業を進めながら内容をアップデートする必要がある。 ・令和4年度1年生から一人一台パソコンの取組が始まる。これを新しい学習の仕組みのスタートと捉え、生徒の主体的な学びに結び付けた授業をつくる。	・授業を進めながら生徒の意見を収集、分析(PDCAサイクル)し改善をすすめる。 ・教材研究及び準備の中、教員間で情報共有を図り、ICT機器の有効な使い方の共有を図る。さらに、指導と評価の一体型の観点から、いかに有効な評価に結び付けるかという観点からも実践から積み上げてゆく。
2 生徒指導・支援	組織的な支援体制により、生徒一人ひとりが落ち着いて学習に向き合える環境を整える。	・全職員が共通認識の中で、生徒に基本的生活習慣を身に着けさせる。 ・コア会議・ケース会議及び生徒支援会議等を活用した教育相談体制によりチームとして支援に取り組む。 ・1年生の部活動加入率を上げるとともに部活動の活性化を図る。	・基本的生活習慣を身に付けさせるために、毎月1回の全職員による一斉指導を行う。 ・二者面談、アンケート及び三者面談を活用して、いじめ等生徒が抱えている課題を早期に発見する。 ・コロナ禍でも部活動ができるよう感染対策を強化する。	・全職員が共通認識をもって生徒の規範意識の向上に努めることができたか。 ・生徒が抱えている課題を早期に見出し解決できたか。 ・日々充実した活動ができたか。	・全職員による一丸となった一斉指導により生徒の規範意識を向上させることができた。 ・ケース会議を13件、生徒支援会議を3回開催し、生徒の課題を職員間で共有し、支援した。	・学校外での生徒の行動に課題が残った。校外パトロールの必要性が強くなった。 ・今年度は児童相談所につなぐ事案が7件あった。外部との連携をさらに強化する必要がある。	・学校の努力にもかかわらず特別指導件数の減少が見られないのが残念である。 ・ボーダーカフェの一層の充実を期待する。 ・下校時での校外指導の強化をお願いする。 ・生徒の状態像が複雑化される中で、様々な努力により規範意識が向上していることを評価する。 ・全職員の教育相談スキルの上に向けて引き続いての努力をお願いする。	・ケース会議や生徒支援会議だけでなく、日頃からの教員間の対話の機会からの情報共有ができてきているか。 ・毎週開催するコア会議により生徒が抱える課題の共有及び解決に向けた協議ができた。教員の相談スキルの上を図る。	・日頃の教員間の話しの中で生徒が抱える課題の解決に向けた方策を旧友できる環境をつくる。 ・ケース会議で、課題を抱える生徒に関係する全教員の意見を出し合い、改善方策の提示及びそれを実行するなどさらなる充実を図る。 ・指導から支援へのシフトチェンジを全職員で理解し、支援という視点で生徒に対応できるよう、研修機会を設ける。
3 進路指導・支援	組織を機能的かつ急進的に動かすとともに、地域や外部機関との協働により生徒の自己実現をサポートし、自立できる力を育てる。	・生徒個々の学習への取組みの充実を図る。 ・インターンシップやボランティアも経験させ、生徒の職業観及び勤労観を育成する。	・スタディサプリを活用して基礎学力を固める。 ・社会体験+インターンシップ・ボランティアに生徒を派遣し、就労に向けた意識づけをする。	・生徒による授業評価の「学習の状況」でかなりあてはまるとほぼあてはまるの割合を80%以上を達成できたか。	・「学習の状況」の「あてはまる」の回答が81%と目標を達成した。 ・社会体験は「やってよかった」という意見が大半だった。	・次年度は基礎力診断テストを用いて3学年とも同じ指標で学力の定着度を測っていく。 ・社会体験はジョブシャドウに視点を置いて企画・運営を行う。	・「社会体験」のアンケート結果からもこれを実施した意義は大きい。理由の分析も欲しい。地域の教育力を活用しているこの取組をさらに進めてほしい。 ・基礎力診断テストの全学年統一化の成果に期待している。	・学年に合わせた進路講話を行い進路に対する意識を高めた。 ・コロナ禍でも地域の力を活用しながら、本校が地域の活力になる取組みを構築することが課題である。	・進路フェアをさらに充実させること ・社会に必要な「あいさつ、言葉遣い及びマナー」を身に付けさせる場面をつくる。
4 地域等との協働	①保護者や地域との協働による開かれた学校づくりを確立する。 ②市との協働事業等に積極的に参加する。	①DIGを通じて地域の防災の仕組みを理解し主体的に取り組める姿勢を確立する。	①学校周辺の危険箇所を把握し、災害時に冷静に対応できる知識を身に付けさせる。	①訓練を終えて生徒の地域への防災意識が高まったか。	①地域と協働して防災訓練の準備を進めたがコロナ禍により実施できなかった。校内での訓練は計画通り実施した。	①訓練の効果がより実践的に定着することを指すための具体策を検討する必要がある。	①地域と連携した防災教育は非常に意義が大きい。さらなる成果をあげられるよう進化させてほしい。	・コロナ禍でも生徒に防災意識を付けられた。地域との協働を再開させる。	・多くの地域住民に防災訓練への参加を働きかけて、地域からも信頼される学校をつくる。
5 学校管理 学校運営	①教育環境の整備と広報活動の充実に取り組み、開かれた学校づくりを進める。 ②安心・安全の学校づくりを基本に情報管理を徹底する等、事故不祥事ゼロとする。	①HP、ツイッター、母校訪問など学校の教育活動や取組状況を発信する。 ②事故防止会議を通じて事故防止のポイントの周知を図る。	①母校訪問に参加する生徒及び訪問先中学校を増やす。 ②事故防止会議後、職員にアンケートを行う。	①母校訪問に参加する生徒及び訪問先中学校が増えたか。 ②事故・不祥事をゼロにできたか。	①コロナ禍ではあったが母校訪問を7人実施することができた。教員の中学校訪問を20校増やし58校実施した。 ②事故・不祥事はゼロであった。	①HPに学校説明会や施設見学の動画をUPした。今後も内容をさらに深め、わかりやすいものを作成するように努める。 ②個人情報の正しい扱い方を職員全体に定着させる。	①母校訪問は生徒が主体的に参加できる重要な活動である。さらなる取組を期待する。 HP動画も優れた実践である。	・HP動画はよい取組みである。さらにわかりやすいものにとするとよい。 ・事故防止会議は職員の意見交換の場を設定することで、より意識を高めることができた。ことができた。ヒヤリハット事例の根絶に向けた取組みが必要である。	・HP動画にストーリー性を盛り込み、本校の特色が容易にわかるよう工夫する。 ・事故防止会議を中心にボトムアップによる事故防止の取組みを構築し安全・安心な学校をつくる。